

親和動機と主張性、対人的疎外感の関連についての検討

太刀掛 諒

キーワード：親和動機 主張性 対人的疎外感

問題

良好な人間関係を築くためのスキルとして主張性(アサーティブネス)が挙げられる。渡部(2006)は、主張性とは適切な自己表現ができるスキルであると定義している。主張性を測定するために多くの尺度が開発され、数多くの研究がなされている。渡部(2006)は、主張性の理論的概念には、「考えや感情の素直な表現」、「感情に流されない主張」、「他者や状況への配慮に基いた柔軟な対応」、「行動に対する主体的な判断」の4要件が含まれると指摘し、この4点を下位尺度とした主張性尺度を作成している。

渡部(2011)はこの尺度を用いて友人関係満足度と主張性の関連を検討し、「素直な表現」の得点が高い群は友人関係満足度も高いということを示している。また、渡部(2009)は高校生に他者配慮トレーニングを実施したところ、精神的不健康の得点がトレーニング実施前よりも、実施後の方が有意に低くなることを示している。

しかし、主張性尺度の下位尺度得点が高いことが、良好な人間関係を形成・維持することにつながると言い切れるだろうか。渡部(2008)の研究では、「他者配慮」の得点が高い群は他者への劣等感を感じ、他者との間で葛藤を経験していることを示している。どのような経緯で相手の気持ちを考えているのかによって、円滑な人間関係を築けるかが変わるのではないかと考えられる。

主張性に影響を与えている要因として、親和動機があると考えられる。親和動機には2つの性質がある。1つは分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表わし、他者からの拒否に対する恐れを要素をもつ「拒否不安」であり、もう1つは拒否に対する恐れや不安無しに人と一緒にいたいと考える「親和傾向」である(杉浦, 2000)。拒否不安が高い者は相手から嫌われたくないと思ひ、他者の顔色をうかがう傾向が強く、自分の考えを言わないだろうと考えられる。しかしながら、相手の顔色をうかがうのは、親密な関係になりたい、親密な関係性を壊したくないという思いがあるためとも考えられる。

また、宮下・小林(1981)は疎外感を「集団生活や社会生活の中で、自分が他者との間に距離感・違和感を感じ、どうしてもなじめない、溶

け込めない、あるいは他者から排除されているという認知的感情」と定義し、さらに杉浦(2000)は対人的な関わりの中で生じる疎外感を対人的疎外感と定義している。杉浦(2000)の研究では、拒否不安は対人的疎外感に対して正の影響を与えており、また、親和傾向は対人的疎外感に対して負の影響を与えていた。

本研究では、自分を理解してくれる人がいない、人間関係において自身が排除されている感じを対人的疎外感とする。自身が排除されていると感じている状態は良好な人間関係を築いているとは言えないと考えられる。主張性が良好な人間関係を築くためのスキルかどうかを確認するためには、主張性と対人的疎外感のような負の感情の関連について検討する必要があると考えられる。

以上より本研究では、主張性と親和動機、対人的疎外感の関連を検討することを目的とする。

方法

調査対象者 地方国立Y大学の学生148名(男性82名、女性66名)。平均年齢は20.07歳($SD=1.59$, 範囲18~28歳)であった。

調査時期と手続き 2014年12月中旬~下旬にかけて、大学の講義時間内に質問紙を配布、あるいは質問紙を個人に手渡しして、回答を求めた。

質問紙構成 質問紙の尺度は以下の3つである。なお、調査対象者のフェイス項目として、学部、学年、年齢、性別を尋ねた。3つの尺度において、選択肢は「1:あてはまらない」「2:あまりあてはまらない」「3:どちらともいえない」「4:ややあてはまる」「5:あてはまる」の5段階評定であった。

1)親和動機尺度 杉浦(2000)の親和動機尺度を使用した。親和動機尺度は拒否不安と親和傾向の2下位尺度で構成され、計18項目の尺度である。

2)4要件理論に基づく主張性尺度 渡部(2008)の4要件理論に基づく主張性尺度を使用した。4要件理論に基づく主張性尺度は計27項目の尺度で、「他者配慮」、「素直な表現」、「情動制御」、「主体性」の4因子構造である。主張的な行動が求められる対人場面(「大切にしているものを友達に貸したのに、なかなか返してもらえないとき」「友

達が、あなたがやったことのない、面倒な作業を頼んできたとき」「授業で出された課題について、友達と自分の意見が異なったとき)を提示し、それぞれの場面において4要件に該当する内容の項目への回答を求めた。

3)対人的疎外感尺度 杉浦(2000)の対人的疎外感尺度を使用した。対人的疎外感尺度は1因子構造で、計21項目の尺度である。

結果

対人的疎外感尺度の因子分析 杉浦(2000)では、1因子構造を採用していた。しかしながら、宮下・小林(1981)の疎外感尺度は、「孤独感」因子、「自己陰悪感」因子、「空虚感」因子、「圧迫拘束感」因子の4因子構造であった。対人的疎外感を構成する要素を再検討するため、本研究では対人的疎外感尺度の因子分析を行った。対人的疎外感尺度について最小二乗法、プロマックス回転で因子分析を行った。固有値の減衰状況(8.92, 1.63, 1.17, 1.11, 0.92...)や、因子の解釈可能性から因子数を3に決定した。第1因子は「私には本当に理解し合える人はほとんどいない」、「悩み等を話せる友人がいない」などで、「非受容」因子と命名した。第2因子は「何かに追いつめられているような感じをよくもつ」、「毎日が緊張の連続で息苦しさを感ずることがある」などで、「圧迫感」因子と命名した。第3因子は「みんなが冷たい目で私を見ているようだ」、「私は他人からあまり信頼されていないようだ」などで、「被害」因子と命名した。また α 係数を算出したところ、「非受容」因子は $\alpha=.90$ 、「圧迫感」因子は $\alpha=.82$ 、「被害」因子は $\alpha=.80$ と高い信頼性が得られた。

得点の算出 親和動機尺度、対人的疎外感尺度に関しては、各因子の項目得点を合計して下位尺度得点を算出した。主張性尺度に関しては、渡部(2008)と同様に、「他者配慮」、「素直な表現」、「情動制御」、「主体性」に該当する項目の得点を合計したものを下位尺度得点とした。

親和動機のパターンと主張性、対人的疎外感の関連 調査対象者の親和動機のパターンを検討するために、親和動機の親和傾向と拒否不安を変数としてクラスター分析(ward法)を行った。デンドログラムの形状を参考に4クラスターに決定した。

次に、各クラスターにおける親和動機の下位尺度得点の高低を調べるために、クラスターを独立変数、親和動機の下位尺度得点を従属変数として一要因分散分析を行った。分散分析の結果、親和傾向、拒否不安ともに主効果が見られた(拒否不安： $F(3,144)=99.58, p<.05$ 親和傾向：F(3,144)=124.13, p<.05)。多重比較の結果、拒否不安得点では、クラスター1とクラスター3がクラスター2とクラスター4と比べ有意に高かった。親和傾向得点では、クラスター1、クラスター2、クラスター3、クラスター4の順で有意に高かった。拒否不安、親和傾向の得点から、クラスター1を「高拒否：高親和」群、クラスター2を「低拒否：中親和」群、クラスター3を「高拒否：低親和」群、クラスター4を「低拒否：低親和」群と命名した。

次に親和動機のクラスターで、主張性の下位尺度得点に差が見られるかを検討するために、独立変数をクラスター、従属変数を主張性の下位尺度得点として、一要因分散分析を行った。分散分析の結果、他者配慮、情動制御において主効果が見られた(他者配慮： $F(3,144)=9.58, p<.05$ 情動制御： $F(3,144)=6.33, p<.05$)。多重比較の結果、他者配慮尺度について、「高拒否：高親和」と「高拒否：低親和」が「低拒否：中親和」と「低拒否：低親和」よりも有意に高かった。そして、情動制御尺度について、「低拒否：中親和」と「低拒否：低親和」が「高拒否：高親和」と「高拒否：低親和」と比べ、有意に得点が高かった。

次に、親和動機の下位尺度得点に差が見られるかを検討するために、独立変数をクラスター、従属変数を対人的疎外感下位尺度得点として一要因分散分析を行ったところ「非受容」因子、「圧迫感」因子において主効果がみられた(非受容： $F(3,144)=5.44, p<.05$ 、圧迫感： $F(3,144)=6.93, p<.05$)。多重比較の結果、「非受容」の得点に関しては、「高拒否：高親和」と「低拒否：中親和」が「高拒否：低親和」と「低拒否：低親和」よりも有意に低かった。「非受容」の得点に関しては、「高拒否：高親和」と「低拒否：中親和」が「高拒否：低親和」と比べ、有意に低かった。各クラスターにおける親和動機の下位尺度得点、主張性尺度の下位尺度得点、対人的疎外感尺度の下位尺度得点の平均点と標準偏差を表1に示した。

考察

主張性の研究について 「高拒否：高親和」群と「高拒否：低親和」群では、主張性の下位尺度得点に差はなかった。しかしながら、「非受容」、「圧迫感」の得点に関しては、「高拒否：低親和」群の方が「高拒否：高親和」群よりも有意に高かった。杉浦(2000)の研究では、対人的疎外感に対して親和傾向が負の影響を与えていることが示されている。したがって、本研究において、「高拒否：低親和」群の方が「高拒否：高親和」よりも「非受容」、「圧迫感」の得点が高いことは杉浦(2000)

表1 各クラスターにおける変数の平均点と標準偏差

変数		cl1.高拒否:高親和 n=55		cl2.低拒否:中親和 n=48		cl3.高拒否:低親和 n=28		cl4.低拒否:低親和 n=18		F値	下位検定
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
親和動機	拒否不安	34.75	3.95	24.54	4.09	35.18	2.86	21.24	5.15	99.59	2.4<1.3*
	親和傾向	38.25	3.12	32.12	4.10	29.86	2.35	20.76	3.72	124.13	4<3<2<1*
主張性	他者配慮	35.02	8.17	29.62	8.19	35.04	7.64	24.94	8.17	9.58	2.4<1.3*
	素直な表現	24.67	4.41	24.69	4.37	24.50	5.08	24.41	4.87	0.02	
	情動制御	17.91	4.26	20.04	3.56	16.86	3.87	21.00	4.58	6.33	1.3<2.4*
	主体性	11.96	1.90	11.60	2.21	11.54	1.97	12.41	1.97	0.94	
対人的疎外感	非受容	28.71	9.12	28.83	8.61	36.04	9.96	34.47	10.88	5.44	1.2<3.4*
	圧迫感	14.84	5.15	14.54	4.34	19.36	5.03	17.00	5.84	6.93	1.2<3*
	被害	6.20	2.58	6.65	2.40	7.75	2.99	7.35	3.16	2.38	

* $p < .05$

の研究を踏まえた結果と解釈できる。しかし、この2つのクラスター間で主張性の下位尺度得点に差がなかったことに注目したい。従来の4要件理論に関する主張性研究の多くは、主張性の下位尺度得点と適応指標との関連を検討している。しかしながら、主張性の下位尺度得点に差がないクラスター間で、対人的疎外感の下位尺度得点に有意な差があったという結果を踏まえると、主張性の下位尺度得点の高低だけで、人間関係を把握することは不十分であるという指摘ができるのではないか。

また、「低拒否:中親和」群の方が「高拒否:低親和」群よりも、「他者配慮」の得点は低かったが、「非受容」、「圧迫感」の得点は「高拒否:低親和」群の方が高かった。つまり主張性の「他者配慮」が高いことは、必ずしも情緒的な安心感が得られるような友人関係を形成することにつながらないと示唆される。

親和動機のパターンと主張性、対人的疎外感の関連について「高拒否:低親和」群と「低拒否:低親和」群において「圧迫感」得点に差がないことに注目したい。杉浦(2000)は、「拒否されたくない」という気持ちは周りに気を遣って自分を抑える行動をもたらすことになり、そのために自由に行動できないといった気詰まりな気持ちを引き起こすと述べている。しかしながら、本研究では、「高拒否:低親和」群の方が「低拒否:低親和」群よりも他者配慮、拒否不安共に高かったが、「圧迫感」においては差がみられなかった。「低拒否:低親和」群は他のクラスターと比較して人と接したいという欲求は強くない群と言える。しかしながら、大学生活でも講義、ゼミナールにおいて人と接する機会が多い。こうした強制的に人と接しなければならない状況に対して、「低拒否:低親和」群は気詰まりな感じを受けてしまうと考えられる。大学では、ピアサポートといった友達作

りの支援を行うことがある。このような支援は人と仲良くなりたいたいが、仲良くできないといった学生を対象にして実施するべきであると考えられる。しかし、「低拒否:低親和」群を対象に友達作りの支援を行うことは、「低拒否:低親和」群が息苦しさを味わうことにつながるとも考えられる。

今後の課題 今後の課題について2点挙げる。まず1点目は、圧迫感の得点を低める方法についてである。圧迫感の得点を低めるためには、1人でいても疎外かれている思いを受けないような雰囲気づくりが必要なのではないか。

次に2点目は主張性を個人だけの問題で考えてよいかという点についてである。本研究で用いた質問紙では、どのようなグループに所属しているのかという項目を設定していない。しかしながら、相手に気を遣わなければならないグループに所属している場合も十分に考えられる。今後は、集団に関する変数と主張性の関連を検討する必要があると考えられる。

引用文献

- 宮下 一博・小林 利宣(1981). 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究 29
- 杉浦 健 (2000). 2つの親和動機と対人的疎外感との関係——その発達の变化——教育心理学研究, 48, 354-360.
- 渡部 麻美(2006). 主張性尺度研究における測定概念の問題 —4要件の視点から— 教育心理学研究, 2006, 54.
- 渡部 麻美(2008). 4要件理論に基づく主張性と社会的情報処理および精神的適応との関連 パーソナリティ研究 2008 第16巻 第2号 185-197.
- 渡部 麻美(2009). 反社会的行動予防策としての高校生向け主張性トレーニングの開発 季刊社会安全.
- 渡部 麻美(2011). 高校生時と大学生時における主張性の4要件と友人関係満足度との関連 対人社会心理学研究, 11, 2011.